

## 仁和寺院家跡

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

建物の跡を発見した!! 2001年2月から4月にかけて、仁和寺の南、双ヶ岡の東で発掘調査を行ない、建物跡や瓦などを発見しました。これらがどういうものであったのか、これから推理してみましよう。

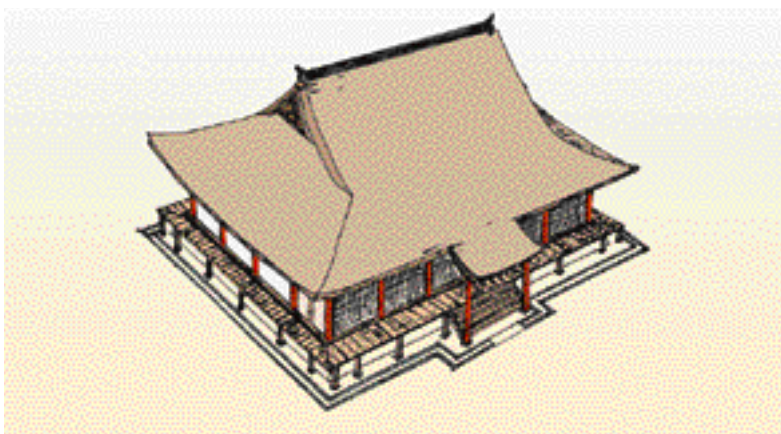
遺構が私に語ること まず建物跡の話から始めます。建物跡は上面が削られ、後世にも部分的に壊されていたので、関係する遺構だけを拾い集めて考えます。

建物跡は、礎石は残っていませんでしたが、礎石を据えるための根固め石が9箇所残り、建物が復元できました。中心部分(母屋)が南北三間と東西二間で、母屋の周りには四面に庇(幅2.7m)が廻り、全体は南北17.6m・東西12.2mの南北に長い建物です。まわりには縁側(幅1.8m)があり、東側には向拝(入り口階段の庇)がそなわり、東が正面であることがわかります。中心部分は50cm近く土を盛り上げて亀腹となっていました。

建物の周囲には石組みの雨落溝が造られ、溝の様子は白河殿や鳥羽殿の仏堂のものと同じです。建物の周辺からは瓦が見つかりましたが、量が少ないことなどから、屋根全体は檜の皮などで葺かれ、棟などの一部に瓦が使用されたと考えられます。建物を復元すると



発見した建物跡から仁和寺を望む(南東から)



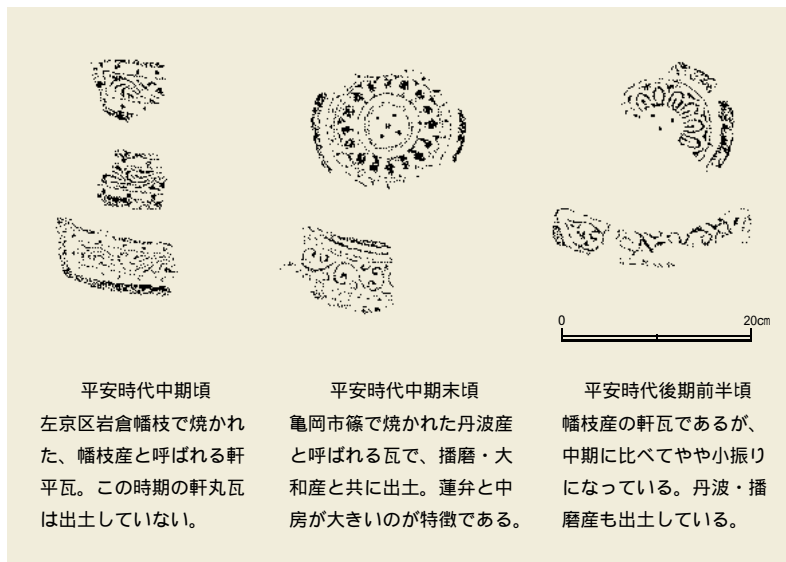
建物推定復元図(川上 貢 作成)

図のように想像できます。

建物跡は、その構造や調査地の場所などから考えると一般の住居ではなく、仁和寺に關係する寺院

(院家)の一部に含まれている仏堂と推定しました。

瓦が私に語ること 調査では、文様の付いた軒先の瓦を、50点余



平安時代中期頃  
左京区岩倉幡枝で焼かれた、幡枝産と呼ばれる軒平瓦。この時期の軒丸瓦は出土していない。

平安時代中期末頃  
龜岡市篠で焼かれた丹波産と呼ばれる瓦で、播磨・大和産と共に出土。蓮弁と中房が大きいのが特徴である。

平安時代後期前半頃  
幡枝産の軒瓦であるが、中期に比べてやや小振りになっている。丹波・播磨産も出土している。

出土軒瓦



仁和寺・院家と調査地 (1 : 25,000)

り発見しました。これらの瓦は作られた時期により3つに分けられます。

1番目は仁和寺造営(888年)の瓦と同じ文様のもので、平安時代中期頃のもので、2番目は奈良興福寺の中金堂再建(1067年)や、御室にある後三条天皇が造営した円宗寺(1070年)の瓦と同じ文様の瓦で、平安時代中期末頃のもので、3番目は白河尊勝寺造営(1102年)の瓦と同じ文様の瓦で、平安時代後期前半頃のもので、出土量は2番目が最も多く、次いで3番目、1番目は数点です。1番目の瓦だけは調査地内で散らばって出土していますが、他は建物周辺から出土しました。

このことから、今回発見された建物が平安時代中期末に建てられ、20~30年後に屋根の補修が行われたことがわかります。また、平安時代中期に周辺に瓦を使用した建物があったことがわかります。

発見した建物はどんな寺であったか? 調査地からは、建物の名前などを書いた木簡や墨書土器は

出土していませんので、仁和寺の院家(付属の寺院や住坊)のことを記録した『仁和寺諸院家記』などによってこの遺跡のことを考えてみます。

これによると、仁和寺周辺には平安時代中期から室町時代にかけて、70箇所余りの院家が造られていました。また、調査地の南側には、平安時代前期から知られた景勝地「双池(雙池)」があったことが知られています。

この池は、江戸時代には埋まっていたものの景石が露出していたことが当時の地誌に書かれ、現在の道路や地形などに痕跡が残り、立会調査でも発見しています。この池の北側が「池上」、南側が「池尻」と呼ばれ、調査地は旧池上村にありました。

双ヶ岡の東側で双池の池上にある院家を捜してみると、以下のようになります。仁和寺創建の約100年後、平安時代中期に宇多法皇の孫の寛忠(池上大僧都、903~977年)が「我覚寺(池上寺)」を造ります。その後、平安時代後

期には頼尊(池上律師、1025~1091年)が「浄光院」を造りますが、我覚寺の東隣にあったと書かれたものと、我覚寺の跡に造ったと書かれたものがあります。その後、鎌倉時代には浄光院を池上千手堂(東千手堂)と合併したとあります。

この千手堂の本尊は寛忠の持仏であり、千手堂は我覚寺の後身とも考えられます。発見した堂は東向きであることから、本尊は阿弥陀如来か千手観音菩薩と推定できます。これらのことから、建物跡は池上千手堂にあたり、2番目の瓦から平安時代中期末に建てられたと推定できます。1番目の瓦は我覚寺に関係するものかもしれませんが。

こういうふうにして、遺構・遺物から色々な情報を引き出すのが、考古学の醍醐味です。このような推理を積み重ねていくことによって、この地域の歴史を明らかにしていくことができるのです。皆さんもぜひ一度挑戦してみてください。(上村 和直)